行きずりの人

東のぶこ

蘭の咲き誇る乾期の終わり、暑期に入る頃、仏教国、タイのバンコク、ドンムアン空港に降り立った。その二か月後の六月には〝プミポン国王在位六十年祝賀行事〟の為に国際空港はスワンナプームに移転する。ドンムアンは国内空港になる。

機体から一歩踏み出したとたん、声を揃えて「ワーッ暑い！」フィンガーの両サイドの窓ガラスも太陽に照らされ、テラテラと輝く。

足下から熱風が湧いてくる。開放的な空港だ。空港ビルの壁面も極彩色で南国風情。眼に映る奇異な光景はプミポン国王とシリキット王妃の肖像画。きらびやかな装飾に縁どられた壁一面の馬鹿でかさ。王様はとても敬われている存在なのだ。王様の高貴なその容貌は国民の崇拝に値する上品な表情を見せてくれている。公平無私のお人柄が敬愛されていると聞く。「この国ならやっていけそう」新たな決意で心は弾む。

樹元千智二十三歳。好奇心でいっぱいの大きな眼がキラキラ輝いている。〝コップンカー（有難う）、サワディーカー（こんにちは）〟が空港ロビーの雑踏のあちこちで聞こえる。

空港ビルを出た寸前に目に映る団子のように固まる車、動いていない。気のせいか……。車列の混みようと煤煙に目を見張る。聞きしに勝る交通事情だ。

「この状態で市内に行くの？　行けるの？」口々に不安を吐露した。

国際協力隊員として総勢十名が赴任。現地研修二週間後には、タイ各地に散らばる。

日本国内での、二か月半の赴任前研修会で仲良くなった、「労働省」に派遣される一歳上の小林陽子と千智は好奇心満開だ。喧騒たる排気ガスと飛び交うタイ語に神経が張り詰める。もみくちゃに混ざった香草、パクチーとナンプラーの香りも、汚れた風に運ばれて鼻腔をくすぐる。

『臭い』といいながらも、俄然張り切る二人。「今日からバンコクだ～」。任期は二年。楽しもう！　頑張ろう！　エイエイオーと雄叫びを上げながらハイタッチをしたらリーダーに怒られた。「日本人らしく奥ゆかしく……」指で口を押える。

二人とも研修で習ったタイ語を実践したくてうずうずしていた。

それぞれが派遣先に行く前に滞在するホテル、フォーチュンで宿泊。現地研修を受ける以外は自由行動だ。

ホテルの玄関を出たら目の前が地下鉄の駅。アクセスは最高。フットワークも軽い。荷物を置くや否や行動開始。手始めにルンピ二公園近くのナイトバザールに行った。この雑然さは何？　裸電球の下、極彩色に彩られた民芸品が異常に安い。迷宮の入り口がぽっかり空いていて手招きする。風の通らない散歩道だ。夢が詰まった迷路街だ。

ミステリアスとワクワク感であちこち足を運ぶ。時々、バンコク通の男性陣が案内してくれる。毎晩のようにナイトバザールに出向く。

暗闇に乗じてインチキくさいと陽子は手厳しいが千智はもうただただ興味津々。見るからに粗悪品だが興味深い。片っ端から発する冷かしの会話も楽しい。人々は馴れ馴れしいが優しい。

それぞれが赴任先に行く前にすごい勢いでバンコクの街中の探検に走り回った。

疲れるとタイマッサージ店に飛び込む。一時間百バーツ、当時一バーツ三円だから三百円だ。スーパーマーケットの隅にも五・六台の簡易ベッドを置いてやっている。日本で疲労を癒すためにマッサージを受けた母千絵が、タイはマッサージ天国よとほめていた。

詳細は語らないが母千絵も二十数年前バンコクにいた。

ワットポーという金色の巨大涅槃像のある寺が医学マッサージの総本山で、日本からの老若男女が学んでいるらしい。そのバンコクに千智も立っている。既視感も無いはずなのに何だか幸せだ。しかも暑くて開放的だからだろうか。何もかもが珍しい。

ここタイは気安くマッサージを受けられる。観光客値段の店もあるが市井の人が使う店は良心的だ。女二人、ついでにエステも美容院も経験する。ひとこと安い。美容院はお湯ではなくて水で洗髪するのでヒヤッとさせる。心臓に悪いが手足の爪まで整えてくれる丁寧さ。ヘアーカット付きで計二百五十円くらい。ロングステイ先として日本人に人気があるらしいが、その魅力が覗ける。

両親と妹とおおらかに育った小林陽子は毛量の多い可愛い丸顔。おしゃべりで愛嬌たっぷりのおチビちゃん。一方、樹元千智は母子家庭で母方の祖父母に育てられた。色白のうりざね顔。上背が高く、モデル並みに痩身だ。父を知らない。

ムワッーとする熱風にまみれた沿道も若い二人はすぐに慣れてしまった。もう数年もバンコクにいるように見えたらしく、日本人の観光客に道を聞かれて舞い上がった。「やったー」二人で現地に溶け込んでいることに喜びのハイタッチで祝う。楽しくなりそう！

四月の中旬。その日は最も有名な王室寺院ワット・プラケーオに向かった。ジーンズをはいていた二人はスカートに着替えないと入館できない。ドレスコードのうるさい国ではないが女性の正装は『スカート』で役所ですら重要会議やＶＩＰの方が来庁する時のお出迎えなどはスカートを着用するように言われることがある。まあ郷に入りては……の世界であえて反論しない。受付で借りて事なきを得た。ワット・プラケーオの帰途、歩道を歩いている二人は街宣車並みの音響に振り返った瞬間、突然水鉄砲に狙われてビショビショになった。「わァ～何々～！」「ソンクラーンよ」「え～これ～？」

タイの正月、「ソンクラーン」と呼ぶ「水かけ祭り」は圧巻で、その水は聖水と呼ばれ

ている。

若者たちが寿司詰めの状態で軽トラックの荷台に乗っている。通過する際にタイ語でおめでとうと叫びながら沿道の人たちに水を浴びせるのだ。ぼーとしていると、白い粉で顔もなでられる。驚きの連続に観光客も興奮して大騒ぎである。がなる大音響の音楽にあわせて踊っている人もいる。熱気にあふれた若い国だ。

「仏教行事」で誰かれなく無礼講で水浸し。一種の「願掛け祭り」でビショビショ度が高い方が？幸運になるのだそうだ。でもすぐ乾く。Tシャツにジーンズ。散々だったが観光客も含めて笑いの渦が広がる。もっと粗末な服で来れば良かった。炎天下の下、水と白い粉の洗礼に胸の動悸もあがる祭りだが腹を立てる人はいない。アメリカ人などは手を広げてシャワー並みに水鉄砲を喜んでいる。喜ぶ人はいても怒る人はいない。

千智の赴任先はバンコク市内から約二十数キロ位の〝ノンタプリ〟地区にある保健省だ。ただただ保健省とその関係機関だけの街。二十二万㎡以上の広大さだ。ゲートから車で十分も走ると五階建てくらいのビル群が数棟見える。警備は二・三重になり、面倒くさいが顔見しりになると顔パスだ。その真ん中あたりに千智がお世話になる医務局棟がある。

その医療技術開発部。大きな部屋が用意されていて驚く。そうかタイの国土は日本の一・六倍。スタッフそれぞれのスペースも広い。

敷地内では、ちいさな街のようにすべてが賄える。市役所、銀行、病院、薬局、スーパーマーケット、レストラン、おしゃれな喫茶店、もちろん美容院、エステ。そしてマッサージ屋、低いが山、川、丘、池、森、誰ももいでもくれないバナナの木など眼を見張る鷹揚さで千智を受け入れてくれた。時々ランチ後に時間があると図書館に行ったり、マッサージ店でひと眠り、バザールの散歩……極楽だった。もう一生涯ここにいてもいいナと思える程ゆったりと時間が流れるところであった。毎朝。作り立ての熱い豆乳もおいしい。ビニールの袋に入れてくれるのに馴染めないが日々慣れてくる。

お掃除のおばさんたちも快活で楽しそう。毎朝「チサト、サバ～イ（元気）？」と声掛けしてくれる。かつて見たことも無い毒々しい色のお菓子を紙に包んでくれる。見た目よりはるかに美味しいが無茶苦茶甘い。素材はタピオカや果物から作られている。総体的にタイ人は甘党だ。果物の王様〝ドリアン〟の生産地らしく山積みで売られている八百屋やスーパーマーケットも魅力的で必ず買う。

日本では見かけない原色のプラスティック製のスツールが並ぶ食堂は安くておいしい。

ランチは二十～三十バーツ。六十円～九十円であがる。おおむね、ライスの上におかずをかけるのだが千智は別々にしてもらった。あの日本の丼はタイ、バンコクの町トンブリから名付けられたらしい。牛肉はめったに御目にかからない。食べない人が多いそうな。

人間より大きい動物は食べないとチアップが教えてくれた。食堂の雰囲気はとてもなごやかで残すような人はいない。食べ物に敬意を払っているのだ。ここにはフードロスはないのだ。もし、もしあれば近くの動物たちが食べている。ココナッツ味やとうがらし味が多い。辛さの種類には驚く。魚は切り身にせず、豪快に油で揚げて、上にスパイシーなソースをかけてシェアーして食べるのだ。甘すぎるデザートに目を丸くする。

壁も無い屋根と柱だけの建物で、フランスのおしゃれなカフェの様子だが少し違うところがある。そこかしこに動物がいるのだ。犬、猫は当然だが、リス、豚、ねずみ、にわとりが気ままに遊んでいる。もちろん野鳥の宝庫でもある。当初はギョッとしたが、これもだんだん慣れてくる。象がいた時は驚いた。人間はいとも簡単にあるべき環境に順応するものらしい。バカでかい犬が廊下で通行を邪魔しているのではじめは怖くて避けていたがだんだんまたいで歩けるようになった。動物たちは暑さの為かほとんど眠っている。昼休みに開店する屋台も楽しい。千智は曜日を決めて、卓球をしたり、太極拳にも参加する。

バンコク中央駅ファランポーンから日本のＪＲからの払い下げ列車に乗るか、アユタヤに向かうチャオプラヤ川を北上する定期船に乗るか。そして車、バスが足である。いろいろ試してみる。

中央駅から列車でバンスウまで乗った時に驚いたのは線路の上に屋台の店の品物が並んでいる。両サイドの連坦する店の売り物だ。危ないナと思っていると、列車の警笛でァアッと言う間にさ～っと片づける。線路がむき出しになる。見事な生活力だ。

列車も遅い。駅舎もない。プラットホームらしい土手があるだけだ。あの状景は心臓に悪いので、バンコクからノンタプリ間は船にした。

一九九九年にＢＴＳという高架電車が開通したのでバンコクの中心地からそれを利用してサパーンタクシンという乗船場を目指す。陽子も登野城一騎も船が一番居心地が良いと言ってくれる。行先を間違わなければバンコクらしく優雅なものだ。

千智も肌にまとわりつく生暖かい風でも、少しヘドロ臭くてものんびり行ける定期船を好んで使う。二〇キロという長い距離なのにわずか二バーツ。六円だ。驚くほど安い。

両岸の街は興味深い。悪臭を放つ川面を、ものともせず泳いでいる子供たちが見える。免疫力が高いのか、鈍感なのか。首を傾げる。水質の専門家である一騎は『不衛生極まりないけれど……順応しているのかな』と感嘆していた。

サパーンタクシン桟橋から歴史あるオリエンタルホテルや三島由紀夫の小説の舞台、暁の寺（ワットアルン）などを通過して、約三十分で着く。橋の名前が大河のメコンからチャオプラヤ川に入ると北部のアユタヤに向かってラーマ一世、二世、三世橋と名付けられている橋を過ぎる。夜になるとライトアップでされて生活排水を感じられないためか橋のあ

る風景は見惚れてしまう。しかし昼の顔は恐ろしい。バンコク市民の下水がすべてこの川に流れ込んでいるのが丸見えだ。汚濁と悪臭で眉が寄る。しかも水草が異常に繁殖している。ライトアップされた両岸の夜の街はロマンチックに満ちている化粧顔。日本人の誰かが『百バーツの夜景』と絶賛したそうな。匂う風も和らぐ。不思議なバンコクの二つの顔だ。

二週間後、バンコク市内を彷徨して、タイ保健省に着任した。誰もかれもが優しく声掛けしてくれる。千智の机の前に毎日のように数人が列を作る。日本に対して好奇心が強いのだ。よろず相談窓口の様相を呈していた。見たことも無いお菓子や野菜、果物なども差し入れしてくれる。毎週花束をくれる人まで表れる。日本の大学に留学していた人達が毎日のようにやってきて「困ったことはありませんか」と一日一回は顔を見せる。タイの昔の写真まで見せてくれる。千智の存在を知った他部署の人までも寄って来てくれて有り難い。フィールドワークの無い日はいつも誰かが側に居てタイ情報を教えてくれる。

タイ人は太っ腹で鷹揚だ。役所で会議の開始を周知しているはずなのにＤｒ．ソンキアットはじめ職員がオンタイムに始まったことが無い。ここでも怒りもせず、微笑をしている。着任当初は、自分の心許ない語学力で聞き間違ったのかと悩むくらい局長会議レベルでも遅れる。千智もイライラしていたが日々図太くなる。何でも「マイペンライ（気にしない）」のタイ。嘆くことはない。千智のオフィスは総勢一〇〇名弱。八十％は女性だ。男性は兵役があるのであまり見かけない。僧侶、警察官、ガードマン、タクシーの運転手、そしてオカマと言われる男性しか目に入らない。年頃の千智も陽子も、「この国の男はどこにいるの？」と疑問符のつく質問をしていたが……女性活躍世界で、不思議な国、タイである。Ｄｒ．ダム曰く、兵役の関係で若い男はいないそうだ。役所のスケデュールもあってないようなものだとだんだんわかってきた。

カウンターパートのＤｒ．までが遅れてくる。（重症だぜこの国）と几帳面な千智はにっこりとうそぶく。やれやれである。『遅刻』は普通なのだ。千智の上司は三十代後半のＤｒ．ソンキアット。イギリスの大学院でＤｒ．の学位を取ったらしい。タイ人にしては大柄で日焼けした美形の方だ。日本では禁止だが、いろいろな病院に「名義貸し」を副業にしているらしく小金持ちらしい。自慢のベンツで走り回っている。そのベンツも年代物で日本では見かけないアンティークだ。国王の秘書官をしていた父親の関係で王室がらみのパーティにも連れて行ってくれる。王室の若い貴公子に出会えないかしら……と冗談を言ったら「いいね。紹介しよう」と笑ってくれる。一度ご紹介を頂いたが背の高い千智には居心地の悪い相手で会った。彼の妻は保健省内にある病院の内科医で働き者だ。彼女の存在は大きく、的を得たアドバイスをくれる人だった。彼女に限らず、女性の働きぶりは日本の

比ではなく感動ものだ。

目まぐるしい日々がスタートした頃、とあるパーティに保健省の職員数名と出かけた。彼ら女達は光り輝くシルクの伝統衣装を身に付け、千智は和服、日本の正装で参加した。千智だけがシワシワのお爺さんに紹介されて意味不明の会話に終始した。言葉の端々に日本に興味があることだけはうすうす理解できる程度だったのに無理やり微笑んでいた。周りの仲間が遠慮して遠巻きにして近づかない？と思いつつまあ難なくお開きになって安堵した。「ナーラック」とシャワー並みに浴びせてくれたので『かわいい、美しい』の連発にいい気分だったけれど楽しいとは言えなかった。（いったいあの方は誰～れ？）

翌日、役所に行くと部屋の中がザワついている。「ハイ、サワディーカー？　何ごと？」と聞くと千智の通訳を買って出てくれる気配り上手なチアップが飛んできて、「千智、凄い！　あの方は保健大臣よ。名誉なことね」キョトンとしていると「またお会いしましょうとおっしゃったんですって！　羨ましい」興奮冷めやらぬ様子の職場は一日中、千智とそのお爺さん大臣の話で盛り上がっていた。千智には枯れたシワシワの貧相なお爺さんにしか見えない。しかも言語意味不明で何の感動も生まれない。顔も忘れた。

あまりそっけないのも失礼なので、「着物が美しいと褒めてくれただけよ」

日本と似ているが社会規範は少々違う。〝権力〟に関する異常な権威主義感覚が強い。

後で知ったが学歴崇拝社会らしい。「学識」より「卒業証書」が幅を利かすらしい。〝能力〟よりそれにウェイトを置く傾向がだんだんわかってきた。『裏口入学』も朝飯前だそうな。プラス〝王族〟に連なれば将来は安泰だ。

国立大学のチュラルコン、タマサート、カセサート、チェンマイ大学で王様や王妃様が一人一人手渡す『卒業証書』は生涯の宝物になるとか。興味深い。

アメリカ映画〝王様と私〟はラーマ五世の一夫多妻王様に、タイを未開文化と指摘した英国人家庭教師の話。無礼にも王様に西欧のマナーを押し付けている、けしからん物語。という理由で上映禁止になっている。確かに、ラーマ五世はタイ各県に百人以上の「妾」がいてその一族は王室一族となり、尊敬されるらしい。陽子と千智は「王族に一員になろう……」「決めた！」などと顔を見合わせてバカな空想に笑った。ほんの冗談だが傍らの登野城一騎にその程度のタイ語じゃ無理だろう。タイ語で愛を語るなんて……そんな芸当は君たちには無理と小馬鹿にされる。確かに「タイ語がな～」のレベルだ。

お互い見合って爆笑した。

週末はバンコク市内を徘徊する。「ほほえみの国」らしくどこに行っても感じがいい。

相手を拝むように胸の辺りで両手を合わせて膝を折る。「サワディーカー（女）」「サワディクラップ（男）」「コップンカー（有難う）」は必須だ。

「二十四年位前に住んでいる日本人を知りませんか」

「父探し」は千智の勝手だけど空振りばかりでめげる。母千絵に内緒で父を探していたのだ。母から聞いたキーワードは『バンコク在住』と『名前』だけ。……（もういないのかな……）

陽子の開けっ広げな性格はあなどれない。どこにでも入って行く。頼もしい相棒だ。一騎も観光がてら手伝ってくれるがいまいち親身ではなく、可愛いい女の子を眼で追う。「おい、あの娘、タイ人かね」「バカじゃない、日本人よ」と陽子はつれない。

当初のワクワクから離れて少し役所でのルーティンワークの段取りが分かり始めた頃Ｄｒ．ソンキアットから日本からのミッションとして数名が保健省に来るから同席するようにと告げられる。まだ何も形にできていないので遠慮したかったが準備に入った。通訳を入れて計四名が見えた。追いかけ五人が視察に日本から来た。日本語と英語ができる千智は重宝がられ、出番が増えた。『看護・介護人材教育』が主な仕事だ。タイ王国全土の公的病院の医師と看護師を対象に日本の看護・介護の実際を講義する。保健省内の病院やリハビリテーション病院、敬老院などがワークショップの主たる実践場所だ。タイにはまだ介護士はいない。

回想法や音楽療法などが日本で実践されている方法論を参考にタイの現状に合わせて試行錯誤しながらのフィールドワークをしてみるのだ。すべからく、世界は持ちつ持たれつ成り立っている。共有のコンセンサスを得るために毎日のように保健省内の病院に行っていた。

日本に遅れること二・三十年すればタイも高齢者問題に突入すると試算されて、中進国としてのタイの将来対策会議も繰り返す。先進国日本のノーハウに学びたいとの要請を日本側進むうちに流暢にタイ語を操る人に気づいた。

涼やかな相貌の人だ。通訳かしらと思ったが日本政府から派遣された事務官、『飯吉卓』と自己紹介していた。まだ二十代かしら、ちょっと気になる奴で眼があうとニコッとほほえむ。黒目ガチでまつげが長い！　惚れ惚れと見惚れている女の子もいる。隣に座るチアップまでがボーと頬を染めている。（日本の男って持てるんだ……暑い日だから？　ホッテっテいる？）

ある日、会議が終わり、別棟のオフィスに戻ろうと屋根付きの渡り廊下をチアップやサピトウと歩いていると一台の車が止まった。中から飯吉卓が出て来た。腰をかがめながら近づいて来る。所作に品がある。

「お疲れさまでした。樹元千智さん、今夜、ランドマークで日泰の親睦パーティがありま

すがいかがですか」と問われ、思わず、「エ～ッ、いいのですか。まだ日本人会に登録していませんが」

「もちろん、お時間が許せば」ちょっと気になる人だったので嬉しかった。彼のさわやかな挙措に炎天下の下、車を見送ってしまった。ギラギラの直射日光は半端な暑さではない。

チアップが「私に声をかけてくれなかったわ」とふくれる。

「チアップ、きっとタイ在住の日本人ばかりなのよ。」

「残念。あの人、素敵ね！」「そォお？」

その夜、パーティ会場で飯吉卓が小学校に入学する前に親の仕事でバンコクに住んでいたことを知った。「ここは僕の第二の故郷なんです」

在バンコクの五十人くらいが参集していた。千智を一番新しい〝友達〟と来客に紹介してくれる。小さく干からびた鋭い目つきの、八十代後半の長老、タイ人のＤｒ．テュクが優しく両手を差し伸べてくれた。「僕はタイ人で初めて東京大学の医学部に留学した」と話してくれた。タイでもエリートなのだろう。ほとんどの方が挨拶にくる。私立のバンコク国際病院の経営者で驚いた。数日前に陽子が腹痛を起こし、その病院に行ったばかりであった。『蚊』が媒介のデング熱にかかり、二週間の安静を言い渡されたのだ。医療費は高いが日本人医師も多く、好評だ。但し国民皆保険が確立していないので診療代は怖いことだが人を見て請求する。……噂に過ぎないが。「退院の時が恐ろしい」と陽子も苦笑した。

公的病院では初診料三十バーツ（九十円）だが私立はとんでもなく高額らしい。それにしても、Ｄｒ．テュクは驚くほど流暢な日本語を話す。「キモトチサトと申します。よろしくお願いいたします」

まじまじと千智の顔を見て、「――母上とそっくりですな。キモトチエさん。美しいお嬢さんでしたよ。バンコクにいる日本人社会は行きずりの人以外は大体知っているよ。タクのお父上もその頃に大使館にいたのかな……」何かを思い出すように遠くをみる。「エ～ッ二十四、五年も昔のことですよ」「僕は日本人会の名誉会員ですから～」と胸を張る。

「そうでしたか、すごい。母は今、京都で高校の教員をしています」

「そういえばランパーンで小学校の先生をなさっていたのでした？」こぼれるような笑顔で問う。

「わたくしは詳しくは知りませんが、たぶん」

「タイの話はなさらないの？」

「今回、わたくしがタイ行に決まった時に初めて聞きました」

「ふーん」

「一度、タイはマッサージがいいのよ……っと教えてくれました」

この場にはふさわしくない話題とわかっていたがその頃に「カリヤミツル」という名を

聞いたことが無いかと聞いてみた。
Ｄｒ．は千智が手渡したメモを自分の上着のポケットに入れた。紳士だ。
傍らの飯吉卓が「Ｄｒ．テュクは日本人社会でも顔が利くから頼もしいよ。彼の知らない人はもぐりか、犯罪者か、バックパッカーか、観光客くらいだよ」と白い歯を見せる。
「わァ～頼もしい」
「チサトさんは世界にどのくらいの種類の『蚊』がいるかご存知ですか？」と話題を変えてくれた。東京大学で『蚊』の生態を博士論文にしたそうだ。『蚊』のうんちくを聞いて勉強になった。
彼のお陰で今の日泰国際協力関係がうまくいっているとの話も満更ではない。『蚊』とも濃密に付き合わなければならないバンコクの日々、いいことを聞いた。陽子のようにデング熱は遠慮したい。
退院した陽子は最近、蚊帳を買って昔の日本の寝床にこだわって、自衛に入った。千智も一騎もよく蚊に刺されるので防除用の噴霧器は必須であった。
どうも『蚊』は異邦人が好きらしい。

その翌日から毎日、飯吉卓一行が保健省に来た。前夜のパーティのお陰で課題がスムーズに進む。局長のＤｒ．シャンビットも日毎に緊張もほぐれたらしく笑顔が増える。
会議の合間も卓は若い看護師たちの人気者だ。「日本に行ったら案内してもらえますか」と真面目に聞いている。「もちろん、喜んで……」「わァあーーじゃ、私も行く！」
わずか二週間の滞在だったが日本側もタイ側もそれなりにコンセンサスを得たようだ。具体化する方向に話は進む。各病院の視察を始めてデータベース化することに決まった。
看護師の資格を持ち、かつ英語が達者なチアップと日本人だがタイ語に明るい飯吉卓は肝心要で、Ｄｒ．シャンビットＤｒ．ソンキアットを頭に健康医療援護局員も合流して日タイのプロジェクトが動き始めた。タイ北端のスコータイ、チェンマイ、チェンライまで。南はパタヤ、プーケット、ホアヒン、サムイ島。西部は『戦場にかける橋』の舞台になったカンチャナブリー。東部のコンケーンの『公的な病院巡り』で忙殺された。なんせ国土は日本の一・六倍。結構広い。保健省の現地の職員の力量が頼みだ。
日本への一時帰国を前に卓が日帰りでパタヤビーチに千智を連れて行ってくれた。パタヤはベトナム戦争時のアメリカの帰休兵たちの休養、娯楽地であった。
戦争後も彼らの人気リゾートになった。全身入れ墨に染まった大きなアメリカ人にぶら下がるこつぶなタイ女性。不思議な光景だ。世界各国からの観光客も押し掛けている。
二人で砂浜にあるデッキチェアーに座り、ココナッジュースを飲みながらそのパタヤの歴史などに唖然としていた時、後ろから近づいてきた三・四人の男女が声をかけて来た。

卓に話しかけている。途切れ途切れに二ホン、カブキチョウ、などが聞こえる。千智にも「トウキョウ、ドコ　スム？」と女性が声掛けする。「ハア？」その瞬間、私たちを案内してくれた運転手がタイ語でわめきながら三人のうちの一人を打ちのめした。二人の財布を狙っていたらしく千智の財布に手を出した瞬間を彼は見ていたらしい。状況が読めなかった二人。窃盗グループの目に留まったことすらわかっていなかった。挙動不審者もわからない幼稚さ。ただ不覚に驚いた。

運転手の彼は海岸沿いのお店でお茶を飲みながら何気に砂浜の私たちを眺めていたらしい。

こげ茶の制服を着た警官が数人走って来た。被害はないかと問われ大慌て。財布やカードを確認した。何と千智のパースがない。カード類も入っている。まんまとやられたのだ。一瞬の出来事だった。パスポートを持参しなくてよかった。その窃盗犯は現行犯でしょっ引かれて行った。私たちも近くの警察署に連れていかれた。土曜日だが役所の運転手に副業として車を出してもらったのだが、それがよかった。彼が言うにはかなり前から二人の周りをウロウロしていたらしい。卓はこんなにボーと隙を見せる千智を憂いて、本気で心配した。

「これから一人でバンコクで暮らせる？」「卓、あなたも危なかったのよ」「うん、確かに」「あいつら集団で来るからナ。気を付けようね」数人の内の一人が親し気にたどたどしい日本語で話しかけ、そちらに気を取られている間に仲間の人がターゲットから盗むという構図らしい。赴任前講習で何度も聞いているのに被害にあった。トホホの小さなできごとであった。人を信じて、疑うことを知らない千智は驚いた。もっとしかりしなくちゃ。ここは異国なのだ。

海に入る時も頭に荷物を載せるくらい気を付けていたのに、隙があるのだ。卓に気を取られていたのだ、きっと。

チリチリと四十度近くの暑さに、やはり、ボーとしていたのも原因だ。湿気が無い分、クラクラするほど暑い。

「フライパンを頭に乗せられたくらい暑い日があるよな」と名言を残し、小さな思い出を残し、時々、飯吉卓が名残惜しい気に日本に帰る。日本でやることも多くなる。行ったり来たり、メールでも連絡できるが近くに息遣いを感じるほうがとびっきり嬉しい。スタッフの女の子達に可愛い和風のお人形などを持ってくるとやきもちを焼く。（わたしの卓なのに……）チアップは生涯大切にすると言ってそのお人形を抱きしめていた。（私へのお土産は？――あッそうか私は日本人だ）

いつも「日本で買ってきて欲しいものな～い？」と聞いてくれる。基礎化粧品や折り畳みの日傘を注文する。そんな繰り返しも楽しみになってきた。

陽子も一騎も卓に会いたいとせがむので一夜、全員でナイトバザールに行った。暑い夜だった。会場に〝フィッシュセラピー〟の店があり、暑いので、泳いでいる魚の水槽に裸足を漬けて魚に突っつかせる摩訶不思議なセラピーを体験することになった。日本の足浴と同じだが温泉ではなく魚が泳ぐ水槽だ。疲れも取れると謳っている。たしかにくすぐったくて大騒ぎしたが、ちょっといけるかも……卓、千智、陽子、一騎の順に水槽の周りに座る。たかだか三十分ほどだがだんだん慣れる。「これ気持ちいいわね」

隣に座る陽子が「千智の足と卓の足ってよく似てるわね」

「外反母趾みたいなのよ。私」

「俺の指、開けっ放しだよ」と一騎。

「先が細いから疲れやすいよ。なあ千智。僕たち繊細だから」と卓。

「はいはい、俺たちは大雑把でございます。なあ陽子」

「一緒にしないで」陽子がふくれて抗議する。見つめられるのが嫌で、無邪気に足をバタバタすると『魚が驚く』と言われ、店の人に叱られた。

音響を目一杯上げたうるさいフードコートでの四人の食事。学生時代に戻ったように盛り上がり、楽しい。氷入りのビールも初めてだがいけるかも。何にでも入れるカプサイシン。男たちは面白がって唐辛子競争をしていた。激辛のハバネロのせいで胃腸は水浸しになり、数日間は胃薬の世話になった。

何処へ行っても口達者なタイ人ばかりでうるさい。仕事の合間に卓と二人になった時は静かでホッとする。ランチの後は卓と二人でヤシの木に囲まれた池のそばのベンチで千智手作りのサンドイッチを広げて、おしゃべりをする。赴任した頃、熟したココナッツが自然落下するのでココナッツの木を避けてベンチがあることに気づかなかった。日陰が欲しくてその木に下にいたらガードマンに「死ぬよ」と声を掛けられ驚いた。年に数人がココナッツの落下で命を失うらしい。それでも〝風の散歩道〟と呼んでいてランチを食べている人もいる。日本からのミッションの連中は昼休みはバザールやマッサージ店、屋台などを周り、精力的に、楽し気に走り回っている。

タイには『口上手は金になる』と冗舌な人は口先一つで金儲けができるという諺がある。誉め言葉だそうだ。ピーチクパーチクと精力的にしゃべっている。一方、日本は『沈黙は金、雄弁は銀』『男は日に三口』全く反対なので卓と肩をすくめて苦笑した。会議もタイ側が断然うるさい。決まるものも決まらない。だいたい清聴傾聴などは死語だ。

「朝、役所に出勤してきた連中が役所の電話で……カー……カー（はい）と電話を始めると三十分くらいしゃべっているのよ」卓が「家で電話すると高いからね」「……知らなかっ

た」
「不思議がいっぱいだけどタイはまだまだ若い国、のりしろが大きいよ」
「知恵ある人、医者、お金や物を恵んでくれる金持ちが尊敬されるのよね」
「たぶん世界中がそうだろうね」
「わざわざ子供の足を切って、乞食にして恵んでもらう……これ本当かしら」
「タンブン（寄付）の社会だからあり得るな」
「卓はバンコクのこと何でも知っているのね」
「いや年々歳々変化しているよ。しかも劇的にね。多少いい方向にね」
「そうね。後進国が中進国と位置づけされたものね」
「私のアパートの側に高級な私立の進学校があるのだけれど、そこに迎えに来る家族の車はほとんど欧米や日本車よ」
「タイの国産車はテュクテュク（屋根付き三輪車）とソンテウ（乗合自動車）だけだよ」
「アーアそうね……。制服が糊付けされてピシッとアイロンがかかっていないとバカにされるのですって。うちの家政婦が言っていたわ」
「年々歳々、先進国病にならないといいなと思っているよ」
「もう少し市井の人の為に、環境に心を砕いてもらいたいわ。こんなに美しい民族衣装の国なのだから。雨が降ると、すぐ洪水になって、足元がぐしょぐしょよ」
「おぼろげだけど、昔はヘドロの道ばかりで僕、すべって転んだことがあるよ。君のご両親もいたのだね……。僕の母はあまりにもつまらなくて高層マンションから飛び降りたくなったそうだよ。笑い話のようだけれど……女性ひとりの外出は出来ない程、公共交通機関の無い時代だものね。兄貴は五歳。僕が四歳だったかな。あの頃はＢＴＳも地下鉄も無くて、ひたすらポンコツの車、テュクテュク、それに象さんだったらしいよ」
「へー象さんか。戦争にも象を使ったのよね。『ローズガーデン』で乗せてくれるのよ。知っている？」
「ローズガーデンか。行ってみる？日帰りでいけるよ。――いつか退職したらバンコクに住むのもいいかな？……」
「まだ三〇年以上もあるわよ。」
　そんなたわいもない会話をしながら、卓と同じ時間を生きていると思うだけで千智は何だか幸せ。身体の奥深い部分でつながっている安心感をくれる人。
（日本人同士だからかしら？　時間が止まればいいのに）
「千智、君はどう思う？」
「好きな国だけれど日焼する！」
「何だよ。茶化すなよ」

「ねえこの国のどこが好き？」
「うーん、千智がいるからかな」
「よく言うわ。初めて会った日に第二の故郷だって言ってたじゃない。」思いがけない反撃にうろたえて笑う。いつの頃からか『千智』になった。千智も今は『卓』と呼び合う。
生まれて初めて射撃をした。そこは「ローズガーデン」というテーマパークで象のパフォーマンス、タイの民族舞踊ショウ、タイ独自のボクシング、ムエタイショウも観戦できる。ニューハーフのダンスのおまけつきだ。園内を散歩しながら、どこからか匂う象の排泄に顔をしかめながらも、思い切って二人で象に乗る。不安定に揺れたが卓がしっかり支えてくれた眺めはいい。身体の割に可愛いく哀し気に見える潤んだ象の眼。千智はちょっと後ずさりすると、象使いが「しっかり持て」と促す。（象さん、毎日毎日辛いのではないかしら）
見下ろすと象園の傍で『白蛇』使いが観光客に囲まれて盛況だったので覗くと、将来、『幸運』になるよと少し触らせてくれた。白蛇はラッキーシンボルらしい。卓もそっと手を添えた。冷たい肌触りの蛇だった。

遊び疲れて市内に戻る帰路、幸運どころか、最悪のタクシーに乗ってしまった。
車内の天井は高名な僧侶の写真がペタペタ。ハンドルの周りはミニ仏像が並んでいる。きっと敬虔なる仏教徒だ。ちょっと安心して卓の肩を借りてうつらうつら。（小一時間でつくはず。う～ん？　少し乱暴な運転だな……）走る景色に一瞬不安が生まれる。四車線もある大通りを競争するように暴走する車とタクシー。（急いでいるわけではないのに……）車が赤信号で止まった時に、やにわに卓と千智を乗せたタクシーの運転手が後ろのトランクから〝斧を〟出して停車している相手の車のボンネットに思い切り斧を振り下ろした。それも何度も振り下す。「何ごと！」うつらうつらが目覚めた。
突発の事件に、卓がすばやく千智を抱き寄せた。「どうしちゃったの、あの人！」卓がしっかり抱きしめてくれなかったら失神しただろう。相手の乗用車の運転手を恫喝して大声でわめいている。相手はボンネットをボコボコにされても低姿勢だ。斧を振り上げる男の殺気を感じてひるんでいるようだ。（殺人事件になったらどうしよう）
『日本人の若い男女が殺人事件に巻き込まれて死亡』まあ、嫌だ！　嫌だ！「私たちに向かってきたらどうするの？」と小声で問う。ゾクゾクと足下から冷気が立ち込める。このくそ暑いバンコクで。ゾクゾクと震えた。卓が耳元でささやく「大丈夫だよ。僕が必ず守るから」息を詰める。幹線道路のド真ん中で喧嘩をする？遠巻きに野次馬まで集まる。パトカーのサイレンがだんだん近づいて来る。「ねえ、お金を置いて降りる？」「ダメだよ」後部座席でダンゴムシみたいに丸まって卓の胸に包んでもらう。息を止める。何か甘い匂

い。父親ってこんな匂い？安心するんだ。場違いな感覚にひとり赤面する。（何考えているんだろう。こんな時に……）

プリプリ怒りながら戻ってきた運転手の言い分は乗客の二人にあやまりもせず、「あいつがあおるように走行の邪魔をするので腹が立った」とその斧を助手席に無造作に放り投げる。二人は身がすくむ思いで息を止めた。卓の手がカリンを離さない。（まずい！降りなくちゃ。卓、降りたい！）フロントガラスのはるか遠くに「ＴＥＳＣＯ　ＬＯＴＵＳ」の電飾看板が読める。

とっさに卓が「運転手さんあのスーパーマーケット、テスコの前で降ろしてくれる？」と声掛けした。「おオ……ＯＫ」メーターに表示された額よりも多く出して、怒りに油を注がぬように冷静な卓。千智の手を離さない。

車から解放されて、ふーッ怖かった。怖い息を吐き切った。気がゆるんで『白蛇』のお陰？笑みがこぼれたが冷や汗でじっとり。卓は「離れるな」とささやき、千智の手を取り、本当にテスコに用があるように入って行った。卓はやっぱり頼もしい。

タイ人は温厚で懐の深い人が多いが環境の厳しさにキレる人も多い。単純なことで喧嘩をする。

思いがけず卓に抱きしめられたあの感触が千智に夢を見させた。（卓は私のこと好きかも……私も？……違う、ただの友達？）

まるで風のように来タイしたかと思うとまたすぐ去っていく卓。そのたびに小さな思い出を作っていく。パタヤの窃盗より、今回の方が怖かったな……。

日タイの国家プロジェクトも幸いにパソコンで様子が分かるし、相談にも乗ってもらえるから有り難い。質問もできるが近くにいないと思うと寂しい。千智は一人っ子なので兄貴ができたようで嬉しくて仕方がない。卓もきっと無理やり仕事を作り、また顔を出すだろう、と信じている。

穏やかで背が高く、眉が凛々しく鼻梁の高い頼もしい人、褒め言葉を並べる千智。あの手のぬくもり、あの息遣い？　あの日、タクシーを乗り継ぎ、やっと自宅に戻った。そこで初めてキスをした。ただそれだけの人なのに、夢見心地だ。

保健省の会議室で卓はじめミッションで来タイした数人が千智の作成したパワーポイントを使ったレクチャーのたたき台の確認作業をしている。Ｄｒ．ソンキアットも参照書類を持って、出たり入ったり、同じくチアップも女性スタッフもいそいそとお手伝いをしている。――このメンバーがずーと居てくれたらいいな。……と千智はボールペンをバトントワラーのように　クルクル回しながら考えていた。厳しい凛とした姿勢の卓も時々、千智を見てニコッとしてくれる。もう日本に帰らなければいいのに……日タイのそれぞれの

提案書の素案を持ってミッションの連中は帰って行った。一応一・二か月後に再度来タイを約束して機上の人になった。

二〇〇六年九月十九日深夜十二時過ぎにけたたましく携帯が鳴った。タイ軍部が「クーデター」を勃発。『自宅待機をするように』憲法は一時停止。全土に『戒厳令』が発布されたのだ。仕事でニューヨークにいたタクシン首相に株取引業で巨額な利益を得ながら脱税をしているという疑惑が浮上。水の中に石を投げ込み、渦ができる如く、大きくなっていったようだ。抗弁も許されず、タイに戻れず、ロンドンに逃亡したとか。

真偽が何層にもなって渦巻いている。本当のところ、外国人の千智には分からない。だいたい、『クーデター』って何？『戒厳令』って？

千智の住まいはノンタプリ、チャオプラヤ川沿いの高層マンション二十七階。ベランダから街の様子を見下ろせる。人一人、犬の姿も無い。戦車が走る。想定外の政権転覆。学校、職場、銀行，商店、企業も全て一時閉鎖になった。

生まれて初めて〝クーデター〟を経験した。「エ～私、日本に帰国できる？」

心細くて陽子や一騎、チアップ、いろいろな人との電話線一本が命綱に思えた。日本にいる卓と母からもやっとつながる。「ミッションで役所に見えたメンバーのお一人、飯吉卓さんに連絡を頂いて今ホッとしているところ。タイ語が上手なの。バンコクの仲間も全員無事よ。心配しないで」

「そのイイヨシタクさんとは特別のお付き合い？」

「まさか。ただのビジネスパートナーよ。ほとんど日本にいらっしゃるもの。この数年は日本とタイを行ったり来たりなさるの。日タイ看護人材教育の開発プロジェクトで両国で其々十人くらい。いろいろアドバイスをもらったり、研修のための教科書作りよ」

母には小さな嘘をつく。

「ふーん、そうなの。ところで今時、クーデターなんて……十五年前は流血クーデターだったのよ。また立憲君主制が軍事政権になっちゃうの？　遅れている国ね」

「たぶん。軍事政権になると大臣も変わるのよね。困るわ」

翌日には軍がコメントを発表。国民の八十％が無血クーデターを讃えたとか。タクシン首相は帰国が叶わずロンドンに逃亡したままだ。テレビは終日ザアザァと雑音。時折プミポン国王の肖像画が画面いっぱいに映る。つくづくタイ王国は不思議に満ちている。

Ｄｒ．ソンキアット夫婦とチアップ、数人の保健省のスタッフが自宅まで迎えに来てくれた。何だかホッとして薄っすら涙目。強がりの千智も異国では弱い。年下のチアップが大丈夫よと抱きしめてくれた。毎日、卓から電話が入った。軍事政権になりミッションが

頓挫するかもしれないらしいと不安気だ。
（神様がやきもちやきで卓との間を邪魔しているのでしょう？）口汚く呪う千智。
（どうしてこうなるの？）と何度も何度も愚痴った。

クーデターの話題がくすぶっている頃、突然、母、千絵がバンコクに来た。母はいつもタイミングよく千智を助けてくれる。（でもどうして？日本の学校って休みに入った？まだよね。有給でもとったのかしら）久しぶりに思い切り、『バンコクの悪口』『バンコクの発展』『クーデター』を語り、タイ料理に舌鼓をうち、役所を訪問して遠慮のない母娘は楽しい数日を過ごした。
「イイヨシさんて飯田の飯に、吉田の吉？」
「うん」
「珍しい苗字ね」
「そうお？　今、クーデターのせいで彼、日本にいるのよ。プロジェクトの存続を望むだけよ！」
「クーデターに遭遇するなんてはじめてで驚いたでしょう？」
「エエ、帰国できないのかとびっくりよ」
父の名（刈谷満）を手掛かりにバンコク中を陽子と歩いていると話したとたん、形相が激変した。血相を失う母。「一体、何のためにそんな人を探しているの？」
「だって……そんな人って……」
「もうとっくにこの世にはいない人よ！」
「エーッ！　嘘！」
「本当よ。それから、日本からミッションでいらした何とかさんなどに振り回されたらダメよ。異国での出会いなど幸せにはなれないものよ」
「ママ！」
「言い過ぎたわ。千智はママが生涯で一番愛した人の子供よ。幸せになって欲しいの」
「わかっている」
「自分で希望してバンコクに来たのでしょ！　そんな死んだ人や、めったに来ない行きずりの人の為に無駄に時間を使ってもらいたくないの。そもそも『男は恋などに命を懸けないもの』なの」
「卓は行きずりの人じゃない！」
赤面してすごい剣幕でしゃべり続ける母千絵を止められない。ただ唖然とする千智は胸の奥でつぶやいた。（ママ何を焦っているの？　何が言いたいの？　何を恐れているの？　どうしちゃったの？）

醜態を見せてしまって照れているのか、冷静になると一転、「ごめんね。千智の人生なのにね。日本から来たミッションのメンバーの飯吉卓さんって結婚していらっしゃるみたいね」と軽く言ってのけた。

「え～ッ！」

「ママね、昨日Ｄｒ．テュクにお会いして聞いたの。飯吉卓さんって三十歳くらいの方よね。素敵な方だけれど彼は既婚者よ。千智にはふさわしくない方だと思うわ」と穏やかに話す。千智にはショックだった。

その真偽も知らず片想いに夢を膨らませ、夢見る夢子さんをしていた自分の愚かさに愕然とした。思考は停止した。「女の敵は女」のレベルのことなのだろうか。自分の娘が自分の娘でなくなるのがこわいからかしら。母をないがしろにするはずもないのに。――その後、飯吉卓から何回も入るメールにも返事が書けない。

気にはなりながら仕事に逃げた。奥さんに悲しい思いをさせてまで、妻の座に座ろうなんてみじんも考えていない。

（早めにわかってよかった。今なら戻れる。私って脇が甘いナ、こういうのを不倫って言うよね……人の不幸の上に築く幸せなんてもろいよ。樹元千智らしくないよ）とつぶやく。初心に戻り、陽子とタイ料理探検に精力を使った。グリーンカレー、パッタイ（やきそば）、ソンタム（パパイヤサラダ）の食べ比べは元気が出た。氷の入ったシンハー、チャンビールは嫌なことを忘れさせてくれる。酔うほどに……。

陽子が「ネエ、あの彼どうしたの？」

「誰の事？」

「ヤダ～飯吉卓さんのことよ」

「特に……」

「え～ェ？――まあ、ちょっと遠距離すぎるわね」簡単に納得している。

「違うのよ」と言いたかったが黙した。

「陽子の方はどうした？」

「なかなかうまくいきませ～ん」照れている。

ここしばらく自分の周りの蠅を追うのに目いっぱいだった千智。陽子にも好きな人がいるらしいくらいしかわからない。その相手が一騎？　彼曰く、朝ルンピニ公園をジョギングしている最中に陽子が途中から仲間に入って来るらしい。考えたな。その仲間の連中に冷やかされているらしい。陽子も頑張っている。応援したくなる陽子だ。でも所詮異国での恋。うたかたの恋かも。お互いに。

その年の暮れ十一月から三か月の予定でプミポン国王生誕八十年を迎える祝賀行事の一環でタイの北部チェンマイで「国際花と緑の博覧会」が開催される。世界各国から三百五十万種以上の花や植物が展示される。国王の誕生色が黄色で全土が黄色に染まった。ホームレスまでが黄色のTシャツを着る。黄色いキャンパスに極彩色の世界の花々。想像しただけで心浮き立つ。タイの事情が分かりかけた頃、仕事を兼ねてチェンマイの花博に行くことが決まった。やったァ！　役所から観光を兼ねて二週間視察旅行の許可が出た。（千智の身勝手失恋旅行にしよう）ひとりで合点する。

陽子や一騎にも声掛けしよう。現地集合だ。千智はチェンマイに行く途上、アユタヤやスコータイにも寄る。病院訪問だ。

窓の外は珍しく雨がしとしとと降っている。ブーゲンビリアもうつむいているようだ。（もう東京も寒いだろうな……）窓枠に肘をついてため息をつく。バンコクも豪快な雨ばかりじゃないんだ。寂しい雨も降るんだわ。卓どうしているのかしら。二人で決めた着メロ『象さん』がよく鳴る。しかし千智は出ない。

二〇〇六年十二月。四か月ぶりに、突然、飯吉卓が保健省に千智を訪ねて来た。日本からのミッションが現在の政権転覆の為に頓挫したという正式の報告であった。保健省側も人事異動があり、軍人に占められている。状況の変化は覚悟していたが……千智には存続してもらいたいと乞われる。

爽やかな風を連れて来た卓。真っ白いシャツに白い歯がまぶしい。泣き出したいほど愛おしい。スタッフの数人が卓の周りを取り囲み、大喜びだ。

「何故来れなかったの？」などと質問攻めだ。

大騒ぎの歓迎が一段落してスタッフたちの姿が消えた頃、卓が千智をじっと見つめる。

「元気だった？　メールに返事をくれないので仕事を作って来ちゃったよ」

「エエ、いろいろあったけれどーーマァどうにかやっているわ」

「軍事政権になって幹部たちが替わっただろう」

「うん、まあね」遠い日本から来てくれたのに心が震えてうまく話せない。

役所でなければ抱きついていたかもしれないがジーと見つめ合うだけだった。気の利いた言葉がでない。気まずい空気を破るように「十二月は千智の誕生日だろ」と花束と小さな紙袋をくれた。あまりの忙しさに自分の誕生日どころではなかった。涙腺が故障しそうだったがとっさに机上のミニの『釈迦像』を卓の手に乗せた。「これお返し、お守りよ」そして柔らかく微笑み、思いがけない『嘘』を告げてしまった。

「私、Ｄｒ．ソンキアットにプロポーズされちゃったの」一瞬狐につままれた表情で手の

ひらの仏を見つめる卓。

「――そうか……そうだったのか。彼はいい人だよ。じゃア、ずーとバンコク暮らしだね」

Ｄｒ．ソンキアットが妻子持ちであることを卓は知らない。千智が出まかせに口を付いてでた大嘘だった。口をしっかり結び、意を決したように腰を深々と折り、千智に、スタッフに丁寧に挨拶をしてカッコいい背中を見せて出て行く。

思わず千智は声をかけた「卓、有難う！」卓は背中を見せたまま、右手を高く掲げて出て行った。職場のあちこちで女の子達の黄色い声が飛ぶ。人気者だ。千智は胸の底から沸き上がる涙をのみ込み、耐えた。（これでいいのだ）眼下に卓が駐車場に向かい、歩いて行く。目ざとく、帰る卓を見つけたスタッフが握手をしたり、お土産入りの紙袋を渡したくて卓を追いかけている。千智は歯がわれるのではないかと思うくらい唇を噛んだ。　その日のバンコクは珍しく一日しとしとと涙雨が降っていた。見下ろす省内の庭には誇らしげにブーゲンビリアが咲き誇っている。雨に洗われ極採色でみごとだ。この花何だか一年中咲いている。初めて卓に会った日も同じ景色だったような気がした。時はどこかで止まったのかしら。クーデター？　戒厳令？　今まで、夢の中に迷い込んでいた？

母が日本に帰ってから二ヶ月少し。彼女の一言一句を復唱してみた。客観性と俯瞰の視点で考えてみると、昔バンコクにいた時に恋をした相手は、千智の父は、「卓の父親」ではないだろうか。冷静な母の支離滅裂振りとなりふり構わない言動。腑に落ちた。

卓のお母さまが自宅の高層マンションから飛び降りたくなったというあの話。辻褄が合う。二人の男の子がいる主婦がタイ生活は面白くないという理由で自殺したくなるものだろうか。夫の不倫を悩んでいたのだ。卓の母親を哀しませた女性、それが千絵？　千智の母、まさか、まさか信じたくない……疑念が膨らむ。

（「飯吉卓」と名前を伝えた直後に母ははるばるバンコクまで飛んできた。兄妹の禁断の恋、不毛の恋を止めたかったのだ。母は必死だったのだ。母を絶望させてはいけない。哀しませてもいけないのだ。もう話題にしてもいけない。覚悟はできた。卓はただの〝行きずりの人〟でいい）

小さな紙袋の中には可愛いい箱が入っていた。ダイヤのピアスとペンダントトップだ。両方を付けて微笑んでみる。「宝物と思い出」が増えた。

〝行きずりの人〟との恋は千智二十四歳の誕生日に終わった。

チアップの一オクターブ高い声が「千智、お昼よ。今日は何を食べたい？　卓にも声を掛ければよかったね！」気の利くいい女だ。